

視察先別報告 ザンビア

【青年海外協力隊】

リビングストーン郡地域開発事務所視察

概要

ビレッジバンキングと呼ばれるマイクロファイナンス（貧困層向けの小規模金融サービス）を通じた女性グループ支援や、フード・セキュリティ・プログラム支援、その他コミュニティの住民を支援できる活動を見出し、それを発展させる。

1

伊澤 咲弥

女性の自立支援団体を作る支援やビレッジバンキングの運営支援などをされている協力隊の方にお会いし、支援先の一つであるコミュニティを訪問した。施設が建つ前は木の下で行われていたスキルアップのための活動が、今では教材の配給など、地域開発母子保健省などの支援を受け運営できるようになった。立場の弱い人たちがスキルを身に付け、生活をより良くしようという概念のもと、識字教室や裁縫教室などが開講されている。協力・支援の介入段階は様々だが、この施設の原点はザンビア人の自分たちで生活を変えたいという想いと行動である。そういった現地の方の想いや活動を大切に、協力隊の方のように人々が自立できるためのバックアップをすることが重要なのだと感じた。

2

伊藤 葉子

女性の経済的自立のために活動している青年海外協力隊の高橋さんと、ある村のウーマンズクラブに行った。ここでは、識字教育をはじめ、裁縫や養鶏など女性が手に職をつけるための教室が多くあった。視察中ふと、一つ前に視察したヘルスセンターで見た、日本ならばまだ制服を着ているであろう年頃の若いお母さんたちの姿を思い出した。彼女たちは何歳まで学校に通うことができたのだろうか。女性の経済的自立を阻む背景には、貧困、教育、女性蔑視の文化など様々な問題が複雑に絡み合っているのだと気づかされた。支援を行う際には、多面的な視野が必要であることを、この視察先から学んだ。

3

今田 澄子

赴任後間もない協力隊員はザンビア人風に髪を編み込み、現地スタッフと母娘のように笑いあっていた。この施設で女性達が技術を身につけても、それを収入に結びつけるルートは用意されていない。その点を問うと、隊員は表情を引き締めそれが自分のこれからの課題だと話す。彼女自身が開拓すべき仕事の幅は広く、途方もない根気と努力、多くの時間を要するものだろう。国の構造、世界経済、大きな諸問題に絡み取られ、市井の小さな善良者たちは窮迫し続けている。任期2年の間にこの愛情深そうな人は、どれほどの悩みと喜びを得、どんな成果を残すのだろうか。見守り続けたい。



4

江口 辰之

ウイメンズクラブでの作業のサポートの視察をさせて頂いた。ミシンを使った手芸作品やピーナツ造りの機械を見せて頂き、マイクロファイナンスによる金銭的支援などについて現地の方から伺った。非識字者の方たちや立場の弱い人たちが手に職をつけるためのやり方などを学ばせて頂いた。ミシンを使い、最終的には製品にしてお金を得て、そのお金により生活をしていく。単純ですが基礎的なことの繰り返しにより生活をする知恵をつけていくことが大切なことと感じた。

5

黒川 叔乃

「ビジネスと知識を繋げる役割を担いたい。」着任して約半年の高橋隊員に今後の目標を問いかけた際に、この言葉が力強く返ってきた。視察したセンター（Ngwenya literacy and skills training centre）では、134もの女性グループが裁縫・養鶏・識字などの教育をうけ、手に職をつけるための知識を学んでいる。また、ビレッジバンキングと呼ばれるマイクロファイナンスを通じて資金を借り、事業を展開しているグループもある。しかしながら全てのグループが資金を返済できているということではなく、また知識を得ても、その後ビジネスとして成り立たせることは決して容易なことではない。そのことを第三者の立場から観察し、アドバイスするのが日本からやってきた協力隊員の役割であると実感した。



Republic of Zambia

6 河本 梨絵 赴任してまだ半年の高橋隊員は、女性の識字教育や職業訓練などを担うトレーニングセンターで、女性団体の運営補助やマイクロファイナンスの貸付金回収など、家政・生活改善に取り組んでいる。このセンターでは、グループで1,000クワチャ（およそ15,000円程度＝平均月給の1.5～2カ月分程）の融資を受け、女性たちが小さなビジネスをおこなっている。原価、利益、返済、と試行錯誤で取り組むことは、女性の職業訓練、自立を支援する有益な取り組みだ。長くこのプロジェクトを指導してきたカウンターパートの、東南アジアでの同様の取り組みについて話すレポーターに興味深く質問する時のまなざしが、とても印象的だった。

7 高場 希恵 リビングストーンの中でも貧しい町ということで、やはり他の町とは少し雰囲気が違う村の中に事務所があるのが印象的だった。ここは女性たちが手に職をつけるために、裁縫や識字、養鶏などを学び、マイクロファイナンスを利用することもできる。大人になってからそういったことを教えてくれるこの施設は、地域の女性たちにとってとても貴重な場所であると思う。ただ高橋隊員もおっしゃっていたように、ここで学んだことを実際にどうビジネスと繋げていくかが課題で、うまく現金収入を得られるようになった人もいれば、そうでない人もいるらしい。自立支援の難しさを感じた。

8 中里 祥子 識字教室や裁縫、編み物などの技術を学ぶセンターが貧困地区の一角に設置されていた。通ってくる女性たちはここで技術を身につけ、現金収入を得る準備をしているという。教育や仕事を得る機会が少ない貧困層の人々にとって、お金の使い方やビジネスの仕方を習得できる場が近くにあるということは、生活を見直すきっかけにもなると感じた。国民の大半が金融機関から融資を受けられないとされるザンビアにおいて、センターは「村の銀行」として女性グループに融資し、ビジネスの訓練の場になっていた。弱い立場にある女性たちが自信をもって生きていくため、現金収入を得るための技術を学ぶ拠点が貧困地区にあることで有効な活動に結びついているものと思われた。

9 花村 さくら 体調不良のため視察不参加

10 峰元 義人 2015年1月に赴任したばかりの高橋隊員はコミュニティにすっかり溶け込んでいるように見えた。この信頼関係が任務遂行に一番必要なものなのかもしれない。
高橋隊員は、識字教室をはじめ裁縫、編み物、養鶏、ピーナツバター作りなど、リビングストーンの中でも貧困層だというコミュニティの女性を対象に、スキルを身に付けさせ、自力で生活できるように支援している。
もう一つは、村の銀行と呼ばれるマイクロファイナンスを通じた支援である。
5～6人のグループに1,000K（1Kは日本円で15円程度）融資し、これを元手にビジネスを行い、返し終わるまで活動を継続するらしい。個人の未返済分は連帯責任としてグループ全員で返すことになるということである。

11 蓑田 竜史 ある男性が貧困地区に教育施設を作りたいというところから始まった。始めは木の下で。女性たちが手に職をつける。南米の貧民街で住民自立を助ける、同じような組織で働いていたことがあるのでとても興味があった。地元の人たちが主体でやっているというのが素晴らしい。スキルを身につけても職が見つかるわけではないが、受け皿があることが大切であり、識字教育も行われているのは女性たちにとって有難いだろう。「村銀行」は5人組の連帯責任制度があるのは合理的だが、返済率が8割に留まっている背景等をより知りたかった。この地区での写真撮影は他の所よりも厳しい（嫌がる）ことに気が付いた。協力隊の方の話だと、貧困に対する偏見や差別を感じたことがないとはいったが、住民にも誇りがあるということなのだろうか。